

「愛子さんだ……」

博巳はハツとした。

「浦部君……愛子さんはいゝ女性だつた……わしは今、あのひとのことを考へる……」

「……………」

「浦部君……かうしてあんたが出發することを、愛子さんは知つてゐるにちがひない……いやきつと知つてゐる……そして、あのひとだけに……」

「社長、そんな話はもう……」博巳も自然に聲を呑んだ。

「……わしはかうして出發つ時に、あの人は會つてゆきたい。あの人には、わしとして話があつたのだ。話さなければならぬ話があつたのだ。……そして、あの人も、きつとわしに話したいことがあつたのだと思ふ。……わしは、かうした事件さへ起らなかつたら、まだすくなくとも四五日は東京に逗留してゐる筈だ……そして、わしはあの人に、話すべきことを、ちやんと考へてゐたのだ。……それもできないで出發する……わしは、なんだか……このまゝあの人に會はずにゆくことを残念だと思ふ……」

「社長。そんなことはもう……は……は……」博巳は強ひて笑ひにまぎらせた。

「おゝ、こゝですわ！」

——その時、二人のつい彼方で、嬉しげな女の聲がした。博巳は顔をあげた。姉の奈津子の姿がまづ眼に入つた。

博巳は思はず立ちあがつた。

「おゝ、お姉さん……」

「まあよかつた間にあへて……Dビルの事務所と信盛館へ電話をかけて出發の時間を聞いたのですよ。追つつけるかどうかと、随分心配しましたわ。」

奈津子はせか／＼いつて見返つた。

博巳も見た。——驚いた。

そこには、彼女のうしろに、浦部子爵と、室谷、彼の妻の里子、そして愛子がゐた。

「おゝ、お父様……」

「博巳、わしはお前と加島さんを見をくりに来たのだ。いや、その前にいろ／＼話したいこと

がある。」子爵は加島へ身體を向けて、どうぞその話のために、ひと列軍だけ出發を延ばして貰ひたいと懇請した。

とりあへずみんなで引返へした上野の精養軒。その別室に席をとるなり子爵はまづ口を開いた。

「加島さん。わたしはまづ、あなたにお話ししなければならん。……かうした出發間際……すべて主要の點だけをお話します。……加島さん。わしは、まづたくあなたを誤解してゐました。このことについては、室谷君が、自分の口からは是非いひたいといつてゐるから、わしからは特になにも申しあげないが、とにかく、昨日のわしの誤解は、やつぱりわしの罪です。それはこゝで改めてお詫びします。そして、また、改めて、博巳を樺太へお連れくださるやうに、わしからお願いします。樺太のあなたの事業には、今日以後、わしの力の及ぶかぎりを御援助するといふことも、こゝで明言します。」

加島は意外のやうに椅子から立つた。一語も發しなかつた。

「加島さん。あなたのその御人格に對して、わたしはたしかに間違つた考へをもつてゐた。わたしはあの會合でやはり一種の群衆心理にとらはれ、自分一個の熟慮すべきものを缺いてゐました。今から考へて、慚愧にたへない。あの時、博巳の惘願に對しても、わしは實は、あまりに世間の條理といふものにかゝはり過ぎてゐた。これ等のことは、一々今更辯解すべきではない。たゞ一切をあなたにお詫びしたいのです。」

「閣下、しかしわたしが恐ろしい前科者であることは……」

「いや、加島さん。今はもうなにもいつてくだらないでも、わしはあなたにいよく衷心から敬意を拂ひ、向後の御事業に、できるかぎりの援助をさせて頂きたいのです。あなたの御事業は、これからまたやりなほした。謂はゞあなたは、新事業に着手されるために、出發されるのだ。昨日までのことは、昨日まででお忘れを願ひたい。そしてあなたの新事業に、わしは双手をあげて賛同して、及ぶだけの力を盡したいのです。会社はこれからまづたく更生の意氣で進むべきで、東京に於ける事業一切を、わたしが今日から、博巳に代つて見てゆきたい。いや見させて頂きたい。わたしはいゝ意味で、向後樺太に於けるあなたの御事業を、當路に運動して

より大きくより確實に拓らきたい。樺太の當局へも、わたしからすぐ文書を出して、なにかの便宜を興へらるゝやう依頼します。——すべてかうした方面は、わしに一切おまかせください。て、あなたは、樺太にあなたの歸らるゝのを待つ諸君とともに、なんの杞憂も顧慮もなく、ズン／＼道をすゝめられたい。」

——この子爵の言葉を聞いた博巳のよろこび！

「お父様。有難う——有難うございます！、僕はすっかり勇氣がつきました。僕はなにも申しません。たゞこの通り、この通り感謝いたします。」

彼は椅子から立ち頭を下げた。

室谷が、衝つと立つて前に出た。

「博巳様……わたくしは、なにかからお詫びしていゝかわかりません。わたくしは今、加島さんとあなた様の前で、一切の自分の罪を懺悔いたします。」

「罪？」

博巳は彼をまつすぐに見た。——彼の額には、一夜にして悔恨の深い皺が刻まれてゐた。

「……はい、罪です。わたくしはこの際もうなにかも率直に申あげます。なにかも……」
室谷は唾をのんで、「昨日の會合のあの混亂は、實はわたくしの計畫なのでした！、ま、ま、お聞きください。私は加島さんに對して、或るたくらみをいたしました。それには原因のあることです。が、その原因は……およそ、加島さんはお考へくださることでせう。こゝにゐる私の家内の里子についての話です。……加島さん、私があなたの前身を知つたのは、この里子の言葉によつてです。どうかそれで里子をお憎しみ下さいませんやうに……一切は私の曲つた心から起つたのです。私は里子を責めました。責める理由も、もうもう遠い以前の彼方に葬られ去つてゐるべきのを責めました。そしてあなたに一つの反抗的な心をもつたのは事實です。それに私は、浦部閣下を利用して、自分の事業をひらかうとする野心がありました。私の事業と加島さんの事業と、同じく木材を目的とすることを申しあげれば、私のかうした憎むべき野心の起つたことも、勿論よくわかりでせう。……昨日の會場には、私は自分の腹心の者を二三名入り込ませたのです。そしてあの混亂の種をまがせたのです。……どうか、かうして一切をあなたと博巳様の前で告白した以上、ゆるすべからざるものでせうけれど、私の罪をおゆるし

願ひたいのです。」

——意外の事實に、博巳も加島も、しばらく言葉なく衝つ立つたまゝであつた。

室谷は急いで續けた。

「加島さん。……あなたに特に聞いて頂きたい。昨夜、私は、すっかり計畫の圖にあつたのをよるこんで、腹心の者たちと祝杯をあげて家に歸りますと、家には恐ろしい事件がもちあがつてゐました。……それは……里子が……自殺しようとしてゐることでした！」

「え？」加島は、チラと室谷の肩越しに里子を見た。

里子は顔をもあげ得なかつた。

「……加島さん、私ははじめて里子の眞實の心を知り、またあなたの御立派な人格を知りました。いや、感じました。なんといふ非道、無残な私だつたと眼がさめました。おゆるしく下さい。どうか私のかうした心をおるしく下さい……私は、今はもう、なにもくどくどお話は申しません。たゞゆるされたいのです。そして自分の罪に對する償ひをしたいと思います。……私は昨夜、夜更けてゐるにもかゝはらず、直に閣下をお訪ねいたしました。身を投げ出して、自分の

悪徳を後悔し懺悔しました。そして閣下に、どうか加島さんの事業を御援助くださるやうにお願いいたしました。……閣下は、私の手をとつて、喜んでくださいました。」

深い感動——

室谷は、なほ言葉を續けた。

「加島さん。私は昨夜から一睡もいたしません。或は昨夜中に、御出發なさりはしまいかと、實は人をあの信盛館にやつて、あなた方には話してくれぬやうにと頼みながら、お兩人が、今日この列車で御出發なされることを確めたのです。そして、閣下とは、向後私が償罪のためとすべき道を御相談いたしましたのです。……加島さん。それについて、是非私のお願ひがある。私をどうか、あなたの事業に専心させて頂きたいのです。私の經營する建築會社を、あなたの會社に合體させて頂きたいのです。私は明日にも、昨日の會合に出席された人々に、もう一度集まつて頂いて、そこで私自身の恥づべきたくらみを一切告白し、改めて加島木材會社の向後の恢復方法を講じるつもりです。無論、閣下も御臨席くださつて、なにかとお口添へくださることになつてをります。……加島さん。どうか私のこの希望と、この願ひをおゆるしく下さい。」

今はすっかり人間として目醒めることのできた私が申しあげることの言葉で、すべてを御寛容願ひたいのです。」

誠意にあふれて、せきこみながらいふ室谷の眼には、涙がにじんでゐた。

子爵もいつた。

「加島さん。この際、もう事情の探求はやめて、たゞ無条件に、すべてを忘れて白紙に——わたしと室谷君に、あなたの事業を後援することをゆるして頂きたい。わたしは室谷君の昨夜からの態度に、まったく敬服した。室谷君はこの罪の償ひのために、向後の一生を捧げたい位にいつてゐる。あなたの寛大な心にすがりたいといつてゐる。すべてはあなたが今、室谷君の口から聞かれた通りだ。室谷君の悔悟に對して、どうかあなたのゆるしを得たい。御諒解を得たい。また、わたしとしても、昨日とつた態度について、はなはだ輕忽であつたことをお詫びする。わたしも敢て辯解はしない。たゞすべてをお忘れくださいと願ふばかりです。そして衷心、あなたの事業のために力を致すことを、お約束します。加島さん。わしのために、また室谷君のために、豁然とした氣持で向後のお力添へする言葉を受けて頂きたい。」

「——有難うございます。わたくしは、よろこんで閣下と室谷氏を御援助をお受けいたしましたせう。加島には、なんのわだかまりのあらう筈はなかつた。彼は靜かに頭をさげた。」

「おゝ、一切を諒解してくださいつたかね？」

「いや、諒解もなにもございません。わたくしは、むしろ自分を諒解して頂いたことをよろこばしく思ふのです。有難いと思ふのです。」

「おゝ、加島さん……」室谷も、晴々したやうに、眼を見張つて、「わたしは、こんな嬉しいことはない！ わたしの罪はどうか……」

「室谷さん。あなたになんにも罪はない。つまりは神の審判さはんです。みんな正しく審さかれたのです。そして今、神の榮光をよるこんでゐるのです。これでいゝのです。わたしも嬉しい。これからなにごゆるしく願ひいたします。閣下とあなたの味方を得れば、わたしはまったく安心して働けます。どうかわたしの事業のためにお力をお貸してください。なにもかもわかつてしまへば、人間は必ずお互に味方であるべきです。さあ……」加島は手をさしのべた。

室谷も、子爵もかはるがはる、堅く加島に握手した。

加島はいつた。

「閣下。どうか、浦部君を、もうすこしわたしの手にお貸しください。これは改めてわたしからお願いいたします。」

「お父様……どうか……」博巳は子爵の前に直立した。

「うむ、博巳！ 行くがいよ。行つて加島さんのために、働いてくれ。ますく立派にお前といふ人間を磨いて来てくれ！ 加島さん。なにぶん博巳のことをお願いする。」

「承知いたしました。しかし浦部君は、もう人として立派です。わたしは浦部君についてこれ以上になにを完成されたいと願ふものではありません。わたしとしては、むしろ浦部君を閣下からしばらく拜借いたすのです。」加島ははじめて軽く笑つた。

奈津子はこの時、もうあまり残りの時間がないのをせくやうに、子爵に、

「お父様……では、あのお話を……」

「うむ。」子爵はうなづいた。「……博巳、そしてお前には、もう一つ急いでいはねばならぬ話がある。聞いてくれるかな。」

「は？ どんなお話？」

ちよつと、いぶかしげな眼をあげる博巳に、子爵は眞實な態度で、

「それは、唐突のことで、お前も驚き、加島さんも迷惑されるか知らんが……この、祝福すべき旅にもう一人、伴侶を連れて行つて貰ひたいのだ。」

「伴侶……？」

「さうだ。是非わしから連れて行つてくれと願ふ伴侶なのだ。それは……」と、子爵はうしろを顧みて、「そこにゐられる愛子さんをだ。」

「え……？」博巳は思はず、父の顔を見た。

里子のうしろに、恥しく面伏せした愛子――

「博巳。わしは、率直にいふ。わしは、愛子さんをお前の妻として選んだのだ。それを勧めたのは奈津子だ。そして、それを心からわしに惻願したのは室谷君だ。昨夜、わしは、訪問をうけた室谷君と夫人の里子さん、それから奈津子も席に加はつて、加島さんの事業を後援することのほか、この話までまとめてしまった。勿論お前にも異存のあらうことではないし、加島

さんにお願ひすれば連れて行つて頂けると思ふ。」

「いや、わたしはよろこんで承知いたします。」加島は博巳を待たずみづから進み出て、「愛子さんには二三度お目にかゝつた。わたしは愛子さんの物静かな、しかも強く正しい意志をもつた婦人であることを、初対面の時から感じておりました。そして、愛子さんの心持、浦部君の心持もよく察してゐました。閣下のお言葉がなくなるとも、この出發に際して、室谷さんにその御意見があるなら、愛子さんと浦部君の話を、口約束でもいゝからまとめて置きたいと思つてゐたところでした。浦部君に代つて、わたしから申しあげる。無論、浦部君に異存のあらう筈はない。またわなしとして、今、こゝから愛子さんを一緒に旅に伴ふことができると思つれば、どんなに満足かも知れません。樺太の生活が、どんなにはげしいもの、苦しいものであるかは、愛子さんもよく察してをられようし、また愛子さんは、それに耐へられる婦人であることは、わたしには分る……」

「社長！それは困ります、今、会社は一日も早く恢復に急がうとしてゐる時です。僕は樺太に着くなり、すぐ斧をにぎつて新しい森に駆けつけねばなりません。そんな場合に……」博

巳は遮つた。

「まあ、お待ち。」と、加島は手で制して愉快げに、「浦部君、一切をわたしにまかせて置いて貰ひたい。愛子さんが樺太へゆかれれば、また愛子さんにして頂く相應な仕事がある。人手は一人でも多いがいゝ。それに、わたしの目的は、あの森の人々に、それ／＼一日早く妻帯させて、ほんたうの人間としての楽しい生活をさせたいと思つてゐるのだ。そして、今度の仕事に取りかゝるのを好機會に、この實現を期してゐる。あの森で、幾十やがては幾百の家族ができあがることは、どんなに嬉しいことかも知れない。これから一年以内には、せめて十組以上の夫婦はつくつて見せたい。さうした時、その森へ来る花嫁へ、教育なり趣味なりを興へることは、愛子さんの役目なのだ、はじめの花嫁の幾人かをよく訓練して置いて貰へば、その花嫁達が、次の花嫁をまたよく訓練してくれるだらう。さうすれば森は、みんな愛子さんのやうな花嫁ばかりになる譯だ。わたしは愛子さんの優しいこと、正しいこと、清いことを知つてゐる。見抜いてゐる。わたしはこんど新らしく拓く森にもう男の氣象を植つける必要はみとめない。男の氣象はあれで充分だ。これからは女の心を植つけねばならない。そしてその女の心のはじ

めの大事な苗となつて貰ふものは愛子さんだ……」

子爵は微笑しながら、これを聞いてゐたが、

「博巳、加島さんがいはれるとほりだ。わしも愛子さんをお前の一生の伴侶とするに、好適な女性だと思つてゐる。お前に相談なしたが、わしはお前の父として、愛子さんをお前の妻として貰ふことに、昨夜室谷君と縁談を取極めたのだ。わしはお前に異存のあらう筈がないことを知つてゐる。わしもいゝことだと思ひ、加島さんもよろこんでくだされば、お前はそれだけでも快諾してくれるべきだ。」

室谷も續いていつた。

「博巳様、不躰者ではございますが、どうか愛子をお連れくださいますやうに。……もう、わたくしからはなにも申しあげません。お願ひでございます。愛子へ向後の覺悟も言ひ渡してはございますし、愛子もよろこんで決心してゐることでございます。そして——愛子の心持も、博巳様はよく汲んでやつてくださることと存じます。わたくしはこれ以上なにも申しあげません。たゞ、お願ひいたすのでございます。」

奈津子もいつた。

「博巳さん。愛子さんとわたしは、まだお交際もしてゐません。でも、あなたが最も信じ尊つておいでの加島様が、あのやうに褒めておいでの方ではありません。加島様のお言葉を承はつただけでも、わたしは姉として愛子さんをあなたに勧めますわ。」

時間をせくまゝに、三方四方から説かれた博巳——ふと、見やつた眼は、里子のうしろに、自分の返事がどうあるかを憂ふるやうに、ジツとうるんでゐる二つの眼と合つた。その眼はハツとさしうつむいた。髪の手が、幽かに震へてゐるのが感じられる——彼は一瞬ためらつた。が、キツと眉をあげて、明瞭に、男らしくいつた。

「お父様、では、愛子さんを連れて樺太へまゐります。」

「むゝ、承知してくれただか！」

子爵は満足げに微笑した。

「閣下、お目出度うございます。」加島は衝つと身を進めて子爵に握手した。そして室谷を顧みながら、「室谷さん。お目出度う。」

「有難う！」

感極まつたか、彼は口もきけなかつた。眼には一杯嬉し涙が溜つてゐた。

加島は、なほそのうしろに、顔もあげずにゐる里子の前へ、二三歩あゆみよつた。

「奥さん。お目出度う。」

「有難うございます……」

里子は形を正して頭をさげた。

「有難うだけはいけないよ。向後のこともよろしくお願ひ申すのだよ。」と、室谷は笑つた。

「なにぶんよろしくお願ひいたします。御遠慮なくお叱り頂きまして。」里子は嬉しげに顔をあげた。

もう、そこには、憎みもなく、恨みもなく、妬みもなく、怒りもなく、呪ひもなく、人間はたゞ一つに融け合へば、畢竟神の意志と裁断との前に、すがすがしい光明を額に浴びて、互の眞實に感謝の眼を見かはせるばかりであるといふことのみが、みんなの心々に絆々と感じられてゐるのであつた。

「さあ、愛子さん。こつちへおいでなさい。わしの傍へ。」と、加島はいつた。

「はい。」——でも、かうなつては、恥しい初心な彼女なのだつた。

「さあ、こつちへおいでなさい。これからあんたは、わたしの仲間だ。旅の道連れだ。いや、——生の浦部君の道連れ、わたしの友達だ。」

「愛子、加島さんの仰つたお言葉を、お前は死ぬまで忘れてはなりませんよ。」里子は健気にうつた。

「はう。」

「では、お前は御免を蒙つて、加島様——の、おそばへゆくがう。」

「……はい。」耳もとまで赤く染めながら、愛子はいよ／＼面伏せに、加島のそばに來た。

「——實はな、加島さん。今日はどんなことがあつても、愛子を連れて行つて頂くつもりで、ほんの汽軍の中だけの支度は、こつちで整へて來たのですよ。」と、室谷は微笑した。「閣下のお邸へ昨夜駐つて、わたしの懺悔から愛子のお願ひまで、なにもかも一時にやつたのですから——そして、今日この御出發を追つかけて、あなたと博巳様に、すべての御快諾を得たわけ

ですから——わたくしとして昨夜から唯今まで、こんなに張りつめた氣持でゐたことは、ありませんでした。いや、もう、これからわたくしの一生に、こんな十幾時間をもつといふことはありますまい。わたしは、やつと今息をつきました。嬉しいのです！ たゞ、もう嬉しくつてたまらないのです！」

「いや、わしも嬉しい。こんなに嬉しいことはない。——いや、こゝにゐるみんな、嬉しいのです。みんな満足なのです！ もうこれでいゝ。これでいゝ！」

加島はうなづきながら高く晴やかに笑つた。

「式や披露はまた時機を得ることにして、みなで、水入らずの祝杯だけは舉げよう。」

子爵はウエイターに杯の用意を命じた。

——プラットホームの混雑のなかをぬけて、博巳は中部の三等車に、まづ三人の坐席をとつた。赤帽の渡すトランク二つ、そして一つのかなり重い大きな馴れないトランク——「愛子」とだけ、つゝましく筆で書いた名刺がさし込んであるのを見た時、彼はなんとなく胸を察された。

た。

「——では、どうか加島さん、博巳のことをお願いする。そして愛子を。」

子爵が、まだこれも馴れぬ調子に、さんをつけずにいつた時、愛子も、ハツと今さら顔をあらめた。

「加島さん、東京の仕事のことは、どうか閣下とわたしにおまかせください。あのDビルの事務所へは、この歸途にもすぐ参るつもりです。また閣下にも、ちよつとだけお顔を出して頂くつもりでございます。明日からは及ばずながらわたくしが毎日、博巳様の代りに出勤して、着々仕事を進めます。あなたもどうか御元氣で、樺太で事業の恢復のために、御努力が願はしいのです。」室谷は強く加島の手をとつていつた。

「大丈夫です。どうか、よろしくお願ひいたします。」加島はもう、磊落に笑つた。

「博巳！ しつかりやつてくれ。加島さんの傍にゐて、なほその上に、立派な人間となつてくれ。わたしは、それを祈つて、お前の歸りを待つてゐる。お前は浦部といふ人間であること、そしてわしの後繼者であること——それを忘れないやうに。誰がなんといつても、お前はやがて

わしに代つて、浦部家を擔ふといふ責任があるのだぞ。」

子爵ははじめて博巳が家に歸るのを待つといふ、父の心を告げた。「誰がなんといつても」といふ時、博巳の眼に、こゝへは送つて來ない繼母の姿をチラと思ひ浮かべた。

「お父様、僕はお父様の子であることを忘れません。」誓ふやうに、しかし、博巳はいつた。

子爵の顔にはこれ以上の満足はないといふほどの、満足の色が浮んだ。

奈津子と里子は、愛子の左右から、なにかの注意や勵ましの言葉を、與へてゐた。愛子の眼には、嬉しいとも、有難いとも、たゞ深い感謝と感動の涙が光つてゐた。

ベルが鳴つた。

加島、博巳、愛子は車中の人となつた。

子爵、奈津子、室谷、里子は、窓際に觸れんばかりに並んで立つた。

——發車の笛。

「萬歳！」

「萬歳！」

どこかで、見送りの一團の聲々が聞えた。列車は動きはじめた。

「では、加島さん！」

「閣下！」

「こちらのことはいかが御心配なく！ 御恢復の日を待ちます！」

「御無事に！」

「さようなら！」

「さようなら！」

送る者、送らるゝ者、互に今日の日よりの多幸ならんを祈りあつて聲をかはした。

帽子とハンカチが、見えなくなるまで振られた。

列車は次第に速力を加へた。——上野の森も、視野からかくれ去つた。

「これでいゝのだ……」と、加島は顔をあげたが、博巳と愛子とが、まだ席につかずに立つてゐるのを見て思はず微笑した。「どうしたのだ？ おかけなさい。さあそつち側へ！ 兩人ともならんで！ ……さうだ。いつまでもさうならんで！ ……はゝゝ。はゝゝゝゝゝ！」（完）

四五〇七〇一 號番員會

昭和十七年六月五日 印刷
昭和十七年六月十日 發行

新しき薔薇

著者

畑 耕 一

發行者

野原 完二郎

印刷者

東京市神田區西神田一ノ九
田 中 舜 二

定價壹圓六十錢

送料 十五錢

發行所

東京市小石川區若荷谷町五六

近代小説社

振替東京一八五〇一八番

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

平賀印刷所

424
242

終



社說小代近